



一九九一年九月三日第三種郵便物承認毎月(一・二・三・四・五・六・七・八)の日発行

〈サロン・あべの〉6月の出会い
「家族でアメリカ！」
ケンタッキー州滞在記を終えて

平成24年6月16日(土) 〈サ

ロン・あべの〉6月の出会いは、

育徳コミュニティセンターに

おいて、「家族でアメリカ！ケ

ンタッキー州滞在記の連載をお

えて」と題して、連載をしてい

ただいた中村かずみさんにお話

を伺いました。

写真にとつて、それをサロン紙
に出させていただきました。周
囲から職場に置いてあったとか、

図書館で見つけたとか、お話し

するきっかけができました。本

当に素人の主婦が文章を書かせ

てもらおう機会を与えていただき

感謝しています。

・はじめに

今日は3人兄妹のうち、長男

を連れてきました。この子を含

めて、3人の子を連れて主人と

5人、ケンタッキー州で半年暮

らした事を書きました。滞在中

は帰ってから文章を書くとは思

っていませんでした。アメリカ

滞在中は普通に家族の思い出を

・家族でアメリカへ

アメリカに行きましたのは、

主人が教師をしていて、勤続20

数年経つと交換留学みたいにし

て外国で実地を学んだり研究し

たりすることが出来ます。丁度

その時期に来ていたからです。

滞在前の年にロンドンへ行き

たいと希望をだしていましたが、

いろいろ難しいこともあり、留
学する年に希望の研究をしてい
る先生がいるケンタッキー州の
大学へ学生として、半年間思い
切つて家族を連れて行こうと決
めました。

当時3人の子どもは、13歳、

11歳、9歳でした。英語も何も

できず、子どもにも迷惑な思い

をさせたかなと考えますが、振

り返れば良い思い出です。

ケンタッキー州は平らなところ

が多く馬が走っていた。ケン

タッキー州の位置を現地でもら

つた地図で説明。みんな車に乗



ついで、そのため肥満の人が多い感じがした。我が家は週末、車を使って子供たちを連れてドライブに出かけた。滞在地周辺は、日本のトヨタ自動車の工場が近くにある。日本人に対してとても親切で気楽に過ごせた。私自身はアメリカ生まれで親の仕事の都合で2歳くらいまで過ごした。現地のスーパーでは、日本の食べ物を売っている。お菓子は外見が似ているが味が違うものもあった。まとめて大量に買って帰る状況であった。とても気持ちよく暮らせた。

・学校の状態

子供たちには地元小学校に入学させたいので、手続きのための書類を書いた。英語、スペイン語、日本語のものがあつた。書類はアルファベットで書いた。学校ではテストを行って得意・苦手の科目など、その子の特性にあつたクラスに分けられる。長男のカズキは、やりとりが苦手で、こちらも学校側に自閉症であることを伝えた。学校側も、そういうお子さんにもプログラムがありますと言ってくれた。アメリカは障害児教育に熱心だと聞いていたが、初めから専門家が来て「お話を聞かせてください」

と言っていた。半年しか滞在しないが、カズキの学習プログラムを考えてくれた。学校側から「どのような特別扱いをしましょうか」と聞かれ、通訳の方もつけていただいた。通訳の方と仲良くなりお友達になつた。とても心強かつた。

アメリカは、移民の集まる国なので、子どもたちがバス停で座つても話しかけてきてくれる。学校へは弁当を持たせていたが、おにぎりをクラスメートから質問を受けたりしていた。食堂もあつたが学校は肥満にならないように生徒にはあまり食べないように言っていた。現地はお肉が安かつた。他にもガソリンや電気代も安かつた。洗濯物はその土地のイメージが悪くなることから外に干さない習慣があり乾燥機を使っていた。現地は電車がないので、みんなのんびりしている。地域と学校がつながっていた。アメリカへの滞在は、留学していた先輩からの話である程度下調べをしていて、後でも何とかなると考えていた。とにかく家族みんなでアメリカへ行き生活したことが良い経験となつた。

休憩のあと、参加者の感想を聞きました。

「こわかつたことは」「田舎より都会の方の交通量が多いので怖かつた。」「3年間の連載本当にありがとうございました。」

お話の後、現地の写真や学校のアルバムをプロジェクトでスクリーンに映して、見せていただきました。

郵便ポストの青、スクールバスの黄色、お菓子はとんでもない原色、木の枝のブリザードの白、警察官が馬に乗って巡視、ハローウインの仮装風景、大きいカポチャなど。

家族で半年間、滞在することの決断力、行動力がすばらしい。外国の風土に触れ、日本とは違う、そこでの経験できない体験こそが、一番の収穫であり財産になったと感じた(サロン・あべの)6月の出会いでした。

(参加者9名 山村貴司)

美智子のこんな話

岸田美智子

「命の選択？ 出生前診断にどう向き合うか」

先日、リバティおおさか（大阪人権博物館）のホールで開かれた米津知子さんの講演会で、テーマは「命の選択？ 出生前診断にどう向き合うか」に参加してきました。

この米津さんは、1972年の優生保護法改悪阻止運動に関わってこられたメンバーで、「DPI女性障害者ネットワーク」のメンバーでもあり、ポリオの障害を持っておられる当事者でもあります。

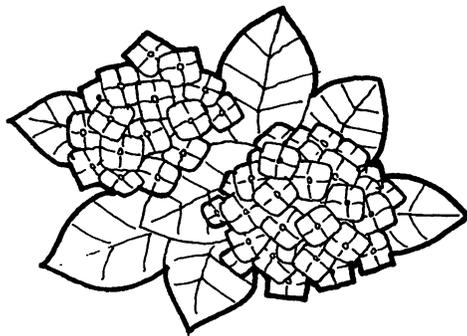
話の内容は、優生保護法（現、母体保護法）の歴史や出生前診断の最近の状況などを、詳しく分かりやすく話してくださいました。優生保護法というと難しくて分かりにくいイメージがありますが、人間の存在

をどうとらえるかという根本的な考え方も話されていました。

人間を人工的な存在としてとらえてしまうが故に、出生前診断や体外受精で女性の子宮に着床させる前の受精卵で、一部の障害の有無が分かってしまう検査も普及しているという報告があった。また、超音波検査で、今まで見えなかつた妊婦のお腹の中の胎児異常が分かるようになり、やはり障害児が生まれてこないようにしてしまう優生思想が、どんどん進んでいますし、個人のレベルで気軽に命が選択できてしまう状況が広がってきているという怖い話もありました。

出生前診断の中にも、いろいろな検査方法が出てきており、妊婦の血液検査だけでも分かってしまう障害もあるそうです。出産という大変難しい選択を迫られた時に、人としてどう向き合うのかは、障害者差別の根源に関係するような気がします。その一つの答えとして、米津さんが言っていた「産む・産まない事を選択する権利は人間にあるが、命を選択する権利はない」という言葉が私には、とても印象に残った講演会でした。

受精卵であっても、胎児であっても、障害児と分かっていた時、何のためらいもなく産む事を選択できる社会の実現に向けて、何ができるのか考えさせられた1日でした。



音楽の効用

クラシック音楽を一番聴いていたのは、中学から高校にかけてのことだったと思う。

いくらから見栄があった。高尚な趣味を持ちたいと思っていたし、周りからもそう思われたいという気持ちもあった。

古典の名曲が、何ごとかを教えてくれているのだと信じていた。そこに言葉はなくても、人間やその生き方について語っているような気がしていた。

切なく、それでも美しい曲は、自分自身のかに流れる悲しい感情を、心の底に沈んでいる汚れた妬（ねた）みや惨（みじ）めな欲望から洗いながし、それをゆつたりとしたリズムに合わせて優しく煽（あお）るように導いてくれた。楽しい愉快な曲は、たとえ私自身が同じような気分になっても、それでも適度な慎みをもってふるまうことを教えてくれたし、勇ましい

曲は、自信を失った心細い時間には沸き上がる力を与えてくれた。

中学や高校のころは、いまから思えば、忙しいようでもたつぷり時間があり、気がつけば何時間もヘッドホーンをつけたまま、目が覚めていても夢見ている気分を味わっていた。

そんなふうに音楽を聴かなければ、感情のバランスが崩れそうだったのだ。子どもからオトナに変わる時期に、何もかもが違って見え、感じるようになっていたから、自分自身の心の流れに、喜びであれ、悲しみであれ、美しい水路のような信頼できる導きが必要だった。

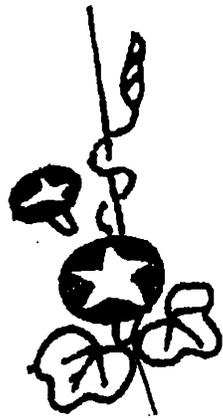
仕事をすることがなくなってからは、ゆつくりと音楽を聴くこともなくなった。聴くとしても、強いビートの効（き）いた数分で終わってしまった。現代風の曲が多かった。それを一時的な気分転換のように使った。何かを忘れるため、逃れるためにポリリュームを大きくして、他の音が聞こえないようにしていた。

五十代の半ばになって、またクラシック音楽に戻ろうかと思う。というのは、通勤列車のなかでも、騒音を消しながら静かな音楽を聴かせてくれる録音機を最近、買ったのである。これなら騒がしい車内でも、静かな居間のような音の空間を楽しむことができる。

音楽がないところで誰かと話しているとき、そして誰かの話を聴いているとき、自分の粗雑な手入れを何もしていないそのままの感情が、疲れた水道栓から水が漏れてくるように満ちてきたら、これはどうにもやりきれない。

そうではなく、イヤホンをつけてなくても、素敵でゆつたりとした音楽が波をうつように頭のなかに流れていたら、私ももつと落ち着いて安らかな心持ちで人と向かいあうことができるのではないか。

百年も数百年も、無数の人の耳にそそがれた音符の組み合わせを、数珠を指先で数えるように、少し疲れた身体（からだ）に流し込むことができたなら、目の前を流れる時間も新しい彩（いろど）りをもち、私の日常も変わっていくかもしれないと期待している。（知）



晴れのち晴れ

稲垣 恵雄

■古稀（70歳）を迎えて

いきなりで恐縮だが、私は今年の7月21日で70歳、いわゆる古稀を迎える。

古稀とは、中国の詩人、杜甫が曲江詩の中に書かれている「人生70古来稀」に由来する。人生70歳まで生きられたら本当に稀で珍しいという意味である。

昔のことを思うと、今は食べる物も住む環境も良くなり、70歳になっても元気で生きている人が大勢おられるので決して珍しいことではない。でも私の場合は生まれつきの障害者で、その上身体が弱くて病気ばかりしていて長生きできないと言われていただけに文字通り古稀だと思う。

ところで作者は不明だがこんな句がある。

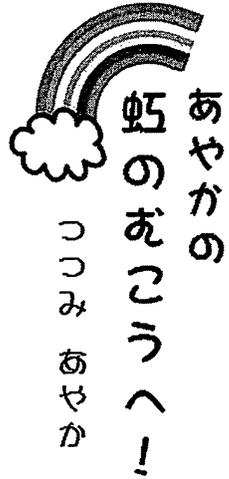
「浜までは
海女も蓑（みの）着る
時雨かな」

この句の意味は、どうせ海女は海の中に入って濡れるのだから時雨ぐらいでいちいち蓑（雨具）を着なくてもよいのと思う、

がたとえ家から浜までわずかな距離であっても雨に濡れずに行きたいという女性としての心づかい、身だしなみを詠っているのではないか。要するにこの句は、その人の生き方、考え方を我々に教えてくれているのだろう。



だからこの私も古稀を迎え、残りの人生を何もせずにノホホンと生きていけばいいというのではなく、やはり今まで通りに目標を立て、それに向かって一日一日を大切に過ごしなさいと、右記の句から教えられたのである。



思春期の頃、とにかく勉強？

小学校の頃にいじめられた経験から、やっぱり自分は、他の人から一目置かれる存在でなければ、いつまで経つてもいじめられると言う危機感と、学年でもトップクラスの成績を取っていた兄の存在と常に比較されてしまうと言う事から、とにかく勉強だけは頑張りました。

その頃、力の弱い者が生きていくには、とにかくいじめっ子のグループに飲み込まれない様なレベルまで自分を高めて行く事しかないと思っておりました。

見た目は、相変わらず色白でなよなよとしていた男の子ではありませんが、「アイツは勉強できるからなあ」と思わせたらこっちのものでした。

もともと、兄ほどの優秀な成績は取れませんが、中学生の頃はクラスでも三本の指に入る位の成績は取っていました。

しかし表では、一見「勉強のできる良い子ちゃ

ん」を演じていたのですが・・・。

家族のみんなが仕事や塾などで留守の時に、

私は、こっそりと母親のタンスから母が若い頃に着ていたワンピースを取り出して着て、口紅を付けて姿見に映る自分の姿を見ると、心が安らぐと言う感覚と、その一方で私は、やはりどこかおかしいのではないかとと言う複雑な気持ちで輻輳しておりました・・・。

誰 も知らない所で、自分が女の子として「日過ぎせる隠れ家みたいなのがあったらいいなあ」と思いながらも高校受験の勉強をやっていました。

「女の子みたい」。第二次性徴がない？

思春期の頃、たいてい中学生から高校生に掛けて、男の子であれば声変りがあったりのご仏が出て、男の子であれば濃くなってきたりしますが、私の場合は、背丈はひよろひよろと伸びてはいるものの、変声期らしきものもなく、体毛も薄くても相変わらず色白な肌をしていました。

体育の水泳の時間は最悪でして、みんな腋毛が生えているのに、私はむだ毛なしのツルツルでしたから、準備運動で腕を思い切り上へ伸ばす事ができませんでしたし、ちよつと下ネタの話になります、水着の股間も、みんなと違ってほとんどスッキリしていたので、「おまえ、チンチン付いてるのか？」って良く聞かれました。

そんな状態だから、修学旅行の宿泊先でのお風呂の時間なんて推して知るべしでした。

私は、できるだけ脱衣室でゆっくり脱いで、浴室の隅っこで少しだけ身体を洗って、そそくさと脱衣室に出たら、男の先生に「もつとちゃんと身体を拭かんかい！」と大声で注意されて却って目立ってしまいました。

そんな事もあってか、真夜中に私の身体を丸裸にしてやろうと言う、いじめっ子たちの計画が進められていましたが幸いにも隣で寝ていた子が、私をかばってくれて未遂に終わりました。そんな中性的な私だったせいなのか、男の子よりも女の子の友だちの方が仲良しでした。

休憩時間に一緒に少女マンガを読んだり、バレーボールをしたりして遊んでました。

女の子の間では「つつつん（私のニツクネー△）は、ほんまにかわいくて全然異性と付き合っている感じがなくていいわ！」ってよく言われておりましたが、なぜか悪い感じがしませんでした。

なぜ、自分が女の子の中にいる方が平和で居心地が良かったのか？まだ良く解っていませんでした。と言うよりも、果たしてそんな状態が良いのだろうか？と言う思いもあってちよつと複雑でした。

サロンへのお便り

森下 公子

七月になりました。

「サロン・あべの」紙312号で、お元気な長居公園の皆さんのお写真を見て、一人で、「お元気、結構、結構」と声を出して喜んでいきます。岸田美智子さんの感動されたお話、とても参考になりました。近くの郵便局の局長さんに、そのうち聞こうと思います。

「物に縛られる」は、ご尤も、私も全くその通り。古い「物」にうずまって毎日を送っています。片付けたいのですが、これまた出来ず、増えてゆく「物」に悩まされています。

暑くなります。何卒お元気で・・・。

H24・7・3記

お知らせ

<サロン・あべの> 8月の出会い

- 内 容：ワークショップでコミュニケーションを楽しもう！！
- お客様：宮脇 淳氏
(ワークショップデザイナー・
「サロンにし」代表)
- 日 時：8月18日(土) 午後1時～4時
- 場 所：育徳コミュニティーセンター、
2階・研修室
[大阪市阿倍野区阪南町5-15-28
TEL06-6621-1901]
- 会 費：なし
- 問合せ先：
- 問合せ先と申込み先：
TEL06-6691-1028 (富田慶子)

サロン・あべの毎月の感謝

○カンパ、お菓子、宛名シールのご提供等、
ありがとうございました。

井上陽子、小島敬大、小西京子、
坂井正子、長澤香、平岡太、宮脇信子、
その他の方、(敬称略)



8月はどこのサロンの、
どのテーマが
お気に入りですか。
いい出会いしませんか。

■「サロン淀川」8月の出会い

日時：8月19日(日)午後1時30分～4時

内容：「大人に語る昔話 パートⅢ」

語り伝えられる民話や昔話聞いて楽しんで下さい。

ゲスト：なんじゃもんじゃの仲間

なにわ語り部会の皆さん

場所：「やすらぎ」大阪市淀川区三国本町2-14-3

会費：なし

問合せ先：淀川区社協TEL06-6394-2900

■「サロンにしよど」8月の出会い

日時：8月25日(土)午後1時30分～3時30分

内容：未定

場所：「ふくふく」西淀川在宅センター

会費：なし

問合せ先：中本TEL090-9864-9678

■「サロンにし」8月の出会い

日時：8月11日(土)2時～4時

内容：「フラダンスを楽しもう!!」

*動きやすい服装で来てください。

場所：西区在宅サービスセンター

[大阪市西区北堀江4-2-7]

参加費：なし、

問合せ先：宮脇淳TEL090-3949-6973

■サロン「アイ」8月の出会い

日時：8月11日(土)午後1時30分～4時

内容：障がいをもつ人達とともに

ゲスト：西浦清輝氏(「サロンアイ」代表)

場所：「おかちやま」区社協、2階ボランティアルーム

[大阪市生野区勝山北3-13-20]

会費：なし

問合せ先：生野区社協ボランティアビューロー

TEL06-6712-3101

■「てくてくすみよし」8月の出会い

日時：8月11日(土)午後15時～

内容：夏バテなんか吹き飛ばせ 夏の大宴会

場所：北の家族

会費：3000円

問合せと申込み先：山本篤江

TEL06-6692-8411

携帯090-5168-5977

■「サロン・つるみ」8月の出会い

日時：8月6日(日)午後1時30分～4時

内容：「ことば遊び・こころの思い出を書きましょう」

*当日はお習字の道具(筆大・小、墨、半紙)や
筆記用具(筆ペンやボールペン等)をご持参ください。

ゲスト：書家 向井千紅さま

場所：鶴見区民センター3階

[大阪市鶴見区横堤5-3-15]

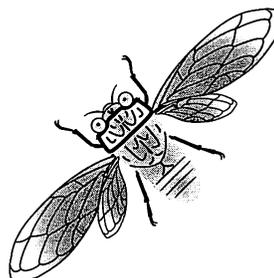
会費：なし

問合せ先：鶴見区社協(ボランティア・ビューロー)

TEL06-6913-7070

■「サロンいたみ」8月の出会いは、お休みです。

問合せ先：安藤れい子TEL072-784-1718



<サロン・あべの>Vol.313 発行：平成24年(2012年)7月21日 定価¥100
編集人：<サロン・あべの>運営委員会 表題：中西利香・筆
事務局：〒545-0021大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 富田慶子方<サロン・あべの>
TEL・FAX06-6691-1028 郵便振替口座：サロン・あべの00950-9-26941
印刷：セルフ社〒546-0044東住吉区北田辺町4-23-2ミスターDビル2F06-6719-8212
ホームページ：http://pweb.sophis.ac.jp/oka/salon/「サロン・あべの」でも検索できます